

第四輯からは更に装いを新たに、活版によって公刊することになった。鎌倉時代語研究会は、又、昭和五十二年以来、色葉字類抄を中心とする当代の語彙蒐集をも続けて来ている。幸い、先般文部省科学研究費を拝受する機に恵まれて、その成果の一端を別に発表し、更に広く多くの諸賢の御誘掖を仰ぐべく力めて来た。

鎌倉時代語の研究に至る入口は、種々あるであろう。われらのこの歩みは、基礎作業を志向しつつ行う、その僅かな一つの、試みの集いに過ぎない。しかし小さな一つ一つの積重ねこそ、斯の道には必要であろう。本誌が、新しい分野を開拓するための、土壤作りの役に立つことを秘かに念じ、且つ、多くの他の入口よりする研究が様々に現れ、実ることを期待するところである。

昭和五十七年三月

小林芳規

巻頭言

目次

巻頭言

佐賀県小城町 岩蔵寺蔵 大般若経に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等

について

小林芳規

金沢文庫蔵仏教説話集の表記体系

山内洋一郎

古文書類における「奉(うけたまはる)」について

三保忠夫

和化漢文に於ける「令」の一用法

来田隆

太平記における希求・懇請の言い方について

菅原範夫

——終助詞「かし」の用法を中心として——

三卷本色葉字類抄における和名類聚抄和訓の受容

村田正英

親鸞聖人遺文の訓読法研究 —— 西方指南抄と草稿本教行信証との比較 ——

金子彰

身延文庫蔵和漢朗詠註抄影印並に翻刻

山崎誠

影印

山崎誠

栄花物語語彙索引稿(三)

高知大学人文学部国語史研究会

翻刻

山崎誠

真福寺本「将門記」漢字索引……………鈴木 恵…三六五

会員近著紹介…………………………三六六

鎌倉時代語研究集会記録……………三七七

「鎌倉時代語研究」(第一輯)第四輯)目次……………三九二

後記……………三九三

目次

一、岩蔵寺蔵大般若経の内容について……………三九四

二、岩蔵寺蔵大般若経の伝来……………四〇〇

三、宋版大般若経に書入れられた角筆の文字等……………四〇五

四、宋版大般若経の角筆文献としての価値……………四一〇

〔附〕 岩蔵寺蔵大般若経巻次別一覧……………四一五

佐賀県小城市 岩蔵寺蔵大般若経に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について

小林 芳 規

目次

一、岩蔵寺蔵大般若経の内容について……………三九四

二、岩蔵寺蔵大般若経の伝来……………四〇〇

三、宋版大般若経に書入れられた角筆の文字等……………四〇五

四、宋版大般若経の角筆文献としての価値……………四一〇

〔附〕 岩蔵寺蔵大般若経巻次別一覧……………四一五

一、岩蔵寺蔵大般若経の内容について

岩蔵寺は、佐賀県小城市小城市町岩倉にある天台宗の古刹である。この寺院に、宋版の大般若経が五百六十七帖、和版及び補写の大般若経が二十五帖、他に表紙のみのもの数点が現蔵せられている。大般若経六百巻の殆どが現存し、そのうち約九十五パーセントが宋版で占められているわけである。

この宋版の大般若経のうち、四百九帖にはその表紙や巻末白紙部分等に、鎌倉時代の角筆の文字や図絵が書入れられている。その分量から見ても内容から見ても、今日までに発見せられた角筆文献には他に類を見ない重要な資料を提供するものである。

大般若経に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について

金沢文庫蔵仏教説話集の表記体系

山内洋一郎

目次

- 一、資料について
- 二、説話部の表記
- 三、説経部の表記
- 四、送り仮名の様相

一、資料について

神奈川県立金沢文庫に所蔵されている『仏教説話集』は、院政期保延六年（一一四〇）の識語を持つ仏教唱導資料である。その国語史的価値として、漢字片仮名交り宣命体の例として、また省文を多く含む漢字字体資料として、今までしばしば採り上げられてきた。このうち、漢字字体について、個々の事象を整理し、位置づけして、全体を見渡す報告がなかった。『金沢文庫蔵仏教説話集の漢字字体』と題して、筆者が既に報告したところである。片仮名字体についても字体表を作成したので、一往字体については措くこととし、表記の全体像を描いてみようと思う。

字体の観点を除くため、引例は活字字体に改める。省文を含む異色ある字体は、改めれば、却って不都合を来す場合もないではないのであるが、印刷の便をも考慮することにする。

所在はページ・行で示す。それは筆者の改訂案による。

構成		本 篇		本 篇		付 篇	
		（一）		（二）			
A	B	地獄	生無常	法会	説話	施主	積尊
ページ	丁	苦患	死界	趣意	話	段	略伝
1	(欠)						
2	(欠)						
3	(欠)						
4	ウ						
5	オ						
6	ウ						
7	オ						
8	ウ						
9	オ						
10	ウ						
11	オ						
12	ウ						
13	オ						
14	ウ						
15	オ						
16	ウ						
17	オ						
18	ウ						
19	オ						
20	ウ						
21	オ						
22	ウ						
23	オ						
24	ウ						
25	オ						
26	ウ						
27	オ						
28	ウ						
29	オ						
30	ウ						
31	オ						
32	ウ						
33	オ						
34	ウ						
35	オ						
36	ウ						
37	オ						
38	ウ						
39	オ						
40	ウ						
41	オ						
42	ウ						
43	オ						
44	ウ						
45	オ						
46	ウ						
47	オ						
48	ウ						
49	オ						
50	ウ						
51	オ						
52	ウ						

本書の組織は二日間の法筵の体を為している。表記の観点からはむしろ説話部とそれ以外（説経部）の二種にする方がよい。説話部は整っており、読み易いが、それ以外の部分はまことに難解である。表記法は恣意的であるように見える。言わば、晴れの書でなく、曇りの書なのである。従って、表記体系と言えほどのものは出てこず、混沌とした様相を確認するだけに終わるのであるが、それはそれで一つの実態であり、他の資料に反射して、有益な材料を呈することもあろう。また、表記の歴史の中で、他に類例の少ない資料として位置を占めることにもなるうと思われる。

二、説話部の表記

説話部においては、通覧して、表記法が比較的安定していると見受けられる。表記体系が把握しやすく思われるので、まずこの分析を行うことにする。

説話は次に表示する七種のインド説話である。本文中に典拠を記しているものもあるが、それに直接拠ったものとは思われない。出典未詳の一話を除き、唐の道世の編んだ『法苑珠林』か『諸経要集』かに拠ったものであろう。そう判断する根拠と説話の内容については今述べるところでない。